

意味研究における実験的手法

和泉 悠 (Yu Izumi)

南山大学

本発表では、言語哲学における実験的手法と、理論言語学における実験的手法について考察する。第一に、固有名の指示の理論に関する実験哲学的研究を紹介する。第二に、言語哲学者 Paul Pietroski らによる量化表現 *most* の意味に関する実験的研究を紹介する。これらの研究の対比から、自然言語の意味研究において示唆されるレッスンを検討する。

心理学において用いられる実験的手法が、言語の意味にまつわる伝統的研究分野(言語哲学と形式意味論)でも利用されている、としばしば語られる。しかし、ここでの「心理学」と「実験的手法」はかなり多様な内容を表しており、たった一種類の心理学や手法を指すわけではない。その点は、本ワークショップ全体を通じて示されることでもある。ここでは、言語哲学における固有名の意味あるいは指示についての研究と、形式意味論における量化表現についての研究を取り上げ、それぞれに当てはめられた実験的手法を紹介する。前者は社会心理学的、後者は認知心理学的な手法といえる。

Machery et al. (2004) は、参加者に文章と質問文を提示するというやり方で、言語哲学における思考実験を集団的に行った。そしてその実験結果として、固有名の理論を支える哲学的直観には東洋・西洋間の文化差が存在すると主張した。Machery らには数多くの批判が存在する (e.g., Izumi et al. 2018)。ここでは、特定の理論や実験の成否よりも、具体的事例を通じて、このような手法が実験哲学の肯定的プログラムの一環として、意味研究にどのように寄与できるのか(あるいはできないのか)考察する。

Pietroski et al. (2009) は、画面上に映る黄色と青のドットについて、*most* が含まれた文 (e.g., *Most of the dots yellow.*) の真偽を判定させる、という視覚課題を用いた実験を行った。そして、複数存在する、真理条件的には同等の *most* の意味の理論について、どの理論がよりもっともらしいのかを判定しようとした。

Pietroski によると、上記のような視覚課題を使用するような実験が意味研究に寄与するためには、意味そして意味の理論についていくつかの前提を受け入れなければならない。本発表では、Machery らの研究と比較しながら、それら前提を明確化し、一般的に、実験的手法がどのように意味研究に寄与できるのか(あるいはできないのか)考察する。

引用文献

Izumi, Y., Kasaki, M., Zhou, Y., and Oda, S. (2018) Definite descriptions and the alleged east–west variation in judgments about reference. *Philosophical Studies*,

175(5), 1183–1205.

Machery, E., Mallon, R., Nichols, S., and Stich, S. P. (2004) Semantics, cross-cultural style. *Cognition*, 92, B1–B12.

Pietroski, P., Lidz, J., Halberda, J., and Hunter, T. (2019) The Meaning of ‘Most’: Semantics, Numerosity, and Psychology. *Mind and Language* 24: 554–85.